

氏 名	トモ マサ マリ コ 友 政 麻理子
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）
学 位 記 番 号	博 美 第 356 号
学位授与年月日	平 成 24 年 3 月 26 日
学位論文等題目	〈論文〉「やまびこ」ー遙か遠く離れたもの同士が交信を図る行為とその可能性についてー 〈作品〉やまびこ
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 小 山 穂太郎
（論文第 1 副査）	〃 准教授 （ 〃 ） 布 施 英 利
（作品第 1 副査）	〃 〃 （ 〃 ） O J U N
（副査）	〃 〃 （ 〃 ） 三井田 盛一郎

（論文内容の要旨）

TVニュースで宇宙飛行士と地球上の管制官との交信の場面が映し出された。

「気分はどうだい？」

「君は今何を見ているの？」

私は、その遙か遠くで行われている、目の前にいない相手どうしの交信に祈りのようなものを感じていた。

人は一人では生きてゆけない。しかし、身体は他者と切り離されている。切り離された身体どうしてある私たちのやりとりは、ノイズだらけで微弱で頼りなく、不安定な周波数帯でかろうじて行われている交信のようだ。たとえ目の前の気の知れた相手どうしであっても、充分言葉は誤解され、気持ちはすれ違う。

日々、様々な方法で他者と関わろうとする私は、どれほど、目の前の他者が発する仕草や言葉の響きが含まれているものを、しっかりと受け止めることができているだろうか。そしてまた、私はどれほど自分の発した言葉や仕草の意味を受け止めることができているのだろうか。関わりを求めれば求めるほど、それは混線して、お互いに身動きがとれなくなってしまう。目の前にいる他者と私との距離は今や遙か遠いものに思える。また、私と、私というものの輪郭も、遙か遠くにバラバラに離れて浮かんでいるようだ。交信は途絶えたかのように感じる。

しかしそんなとき、不意に予期せず沈黙が訪れることがある。不意に訪れた沈黙によって、普段は気にもとめない些細なノイズが目の前に押し出されてくる。それは、理由も問わないくらいの小さな微笑みや、記憶の奥底に沈んでいた物語や、所在の解らないまなざしや、遠い音の響きや、地味な身体感覚などだ。それらは、普段なら意識の中心に現れることなどない。

しかし、不意に現れたこれらのノイズは、私や他者や遠くの場所で発せられた信号の残像や残響なのではないだろうか。私は、これらの残像や残響に立ち止まり、それらが織りなす連なりを辿っていくうちに、私の生や他者の生を乗せて流れていくような、根源的な領域があることを感じるのだ。ノイズだと思っていたものは、根源的な領域からの交信の呼びかけだったのではないだろうか。

そのような、私や他者を乗せる流れのようなものがあるのならば、それに届くように、ノイズが聞こえる方向に対して応答することが、遙か遠くの他者との交信を可能にするのではないだろうか。たとえ、

そのときの私の応答が、目の前の他者にとっては方向を間違った、ノイズにしかみえなかったとしても。

私はどうかして、この遙か遠く離れたものとの交信をあきらめずに図りたいと願っている。そして、交信の結果ではなく、このような「遙か遠く離れたものとの交信を図る行為」こそが、生きて死ぬ人間が、たとえそれが微弱なものだとしても、希望と呼ぶものになりえるのではないだろうか。交信が叶ったその先の風景は幸福なものであってほしい。しかし私が探求する対象はその幸福な風景ではなく、「遙か遠く離れたものどうしが交信を図る行為」それ自体だ。

以上のような思考のもとに、本論文では「遙か遠く離れたものどうしが交信を図る行為とその可能性について」論考する。本論文は以下のような構成をとる。

## 序章―遙か遠く離れたものどうしが交信を図る行為とその可能性について

序章では自身の作品制作全般においての主要な動機である、「コミュニケーション」について、問題意識を明らかにし、基盤となる思考を記すと共に、本論文の目的と構成を示す。

## 第1章―第4章

第1章―第4章は本論文の主軸となる文章群である。ここでは、作品制作において重要となった体験談や、思考、パフォーマンス作品を改めてシナリオ化したもの等が示される。ここでは、自作の内容に共鳴しながらも、それぞれに独立した体験や思考が示される。実際の作品が主音だとすると、第1章から第4章までの文章群は、主音に響く残響だ。

キーワード：ノイズ、フレーミング、写真、残像、向き合う、背中合わせ、映像、家族、演技、信頼、身体、縁、無縁、アジール、ごっこ、口頭伝承、型、ものまね、流れ、オノマトペ、残響、やまびこ

## 残響1―2

残響1―2では、作品《やまびこ》に関連した、「オノマトペ」と「やまびこ」を考察する。

## 終章 やまびこ―遙か遠く離れたものどうしが交信を図る行為とその可能性について

終章では作品《やまびこ》の解題と、本論文のまとめを通して、「遙か遠く離れたものどうしが交信を図る行為とその可能性について」論考する。

## 付録 自作についての図版と解説

本論文は以上のような構成により、考察を積み重ねることで、本論文の目的である「遙か遠く離れたものどうしが交信を図る行為とその可能性について」論考する。

(博士論文審査結果の要旨)

友政麻理子の作品群を貫いているのは、本論文のサブタイトルにもあるように、「遙か遠く離れたものどうしが交信を図る行為とその可能性について」というテーマだ。この論文では、そのような友政自身の作品を振り返り検証することで、その作品がもっている美術としての意義を明らかにしていく。

序章では、「コミュニケーション」の問題について、他者と関わることについて触れ、本論文のタイトルでもある「やまびこ」という、自身から発せられ、反響して帰ってくる現象への、本論文での取り組みが、まず示唆される。

第1章の「フレーミング／ノイズ」では、祖母から聞いた「お話」がもとになっている作品である『花電車』への言及から始められ、そこに作者と家族という、ごく私的な、しかし人との関わりでは最も基

本的な構造が明かされる。友政は映像作品を手掛けるが、鮮やかな色彩の花と、祖母の姿のからみは、どことなくリアルでありながらリアルを超えた雰囲気がある。この章では、やがて心霊写真などの現実を超えた世界へも言及されていく。

第2章の「コミュニケーション」では、『お父さんと食事』などの作品が、シナリオと論考など、さまざまな文章スタイルを交錯させて検証されていく。『お父さんと食事』は、赤の他人の男性と、カメラの前で父と娘という虚構の関係をむすび、父娘の会話を演じていく。どこかぎこちない、間のある会話だが、その「間」の裂け目から、人と人のコミュニケーションの深淵が浮き彫りにされていく。筆者の友政は、論考のなかで、美術の魅力とは、この「コミュニケーションの断絶の能力にあるのでは」と論じる。

さらに第3章の「身体」では、他人との交信が、演技や言葉によるコミュニケーションではなく、身体そのものの関係とした作品が取り上げられる。作品『信頼のメソッド』では、背後に倒れる体を、もう一人の人間が支える、といういわば背中と手の身体での関係が取り上げられる。垂直な姿勢が後ろに倒れるというのは、二足直立する人間にとって、もっとも不安なものであるが、背後に助ける人間がいる「信頼」が、映像として浮き彫りにされる。この章で「身体」が出てくることで、筆者の作品および論文のテーマに、人間の姿というものが大きな意味をもっていることが示され、筆者の映像作品のつねに中央にある「身体」が、映像あるいは美術としての主要なモチーフであることが確認される。

第4章の「アジール」では、3章に続き『信頼のメソッド』が取り上げられる、一方でフェデリコ・フェリーニの映画なども取り上げられ、筆者の作品の映像として、また美術としての位置付けが明らかになっていく。

筆者の友政麻理子の作品には、人物と、その背景の風景がある。人物が近景で、風景は遠景。つまり、そこには「中景」が欠けている。それはダ・ヴィンチの『モナリザ』にも似た構造の美術である。しかし友政の作品は、視覚芸術としての美術でもあるが、映像作品であるがゆえに「音」がある。本論の最終章において、その音が、人の声が発するオノマトペ、そして論文タイトルでもある「やまびこ」へと発展していく。やまびこは、果たして「遙か遠く離れたものどうしが交信を図る行為とその可能性」があるか。そのような問いと、作品という解答とともに本論文は終える。

この論文は、自身の美術作品制作をベースに論が展開していくが、けっして単なる「自作解説」に終わっていない。自作の検証を通して、美術として、人間としての普遍的なテーマに迫り、問題が深められている。多くの文献を参照して考察し、またその思考にはオリジナリティがある。

よって、本論文を東京藝術大学の博士論文として合格としたい。

#### (作品審査結果の要旨)

友政麻理子の博士課程後期修了作品の審査結果の“要旨を申し述べます。

作品「やまびこ」は映像とインスタレーションによって構成されており、室内外（山地、海浜、街）に於いて任意の人々の言語、発声、行為の映像を編集したものである。作品のメインコンセプトはコミュニケーションの新たな可能性を開くことにあり、その方法として人々に或るパフォーマンス的な身体動作や発声をさせ、映像を撮り重ねていくのであるが、作者はこれまでの制作した作品から今作に至るまで一貫してとっている手法がある。作者は制作の様々な協力者（身内も含む老若男女）に制作過程の中で常に何らかのルールや縛り、規則性を課すのである。この手法の意図は、現代に於いて人々のコミュニケーションは容易ではないとの観点から先ずその不可能性を出発の起点とすることによって、我々の相互理解の危機的状況やコミュニケーションの不可能性を打開するための「負荷」として機能させようとしているからである。

作者は学部1年の頃より、現在の制作に繋がるコミュニケーションの可能性を模索するような制作を

始めているが、当時から既にその負荷の方法的重要性に着目し、その時々制作形体に応じた負荷を考案し使用している。そして一連の行為の中でかけられる負荷には、或しぐさの可笑し味、ユーモア、色彩による視覚的効果などを効かせながら強制的な印象や枷の不自由さに貶めない配慮が巡らされている。今作「やまびこ」では協力者達に“愛している”という言葉それぞれの思いを込めたオノマトペに変換し、様々な場所で発声させている。しかし各人によって造語された言葉や音は最早他者には伝わりようのない声であり、意味の骸と化してしまうのであるが、作者はここにまた一つの負荷を課そうと試みている。作者の言によれば、やまびこという行為は意味を誰かに伝える行為ではなく、発声の勢いを以て自身を外部世界に放擲するための行為なのだという。そしてそれによって出来た我が身のウツロに外部や他者、つまり世界を呼び込むためにあえて自身に欠損をつくるのだと言う。我が身に束の間生じた場処に流れ込んできた外部世界、誰かの声、何かの残響、時間、記憶、は此処では渾然となり個人の境界や閾域を越えて互いの緊張を解き、触れ合うことを可能にするのではないかという推測と、密やかではあるが確かな手応えと一縷の光をこの作品で私達に感じさせようとしている。作品は2011年の7月、藍画廊（東京）での個展で最初の展示をして、以後更に改良を進め今回の形態に至ったが、制作はまだ今も継続されており不断の運動として展開されている。以上のことから今作品「やまびこ」は、アートであると同時に非常に独自性に富んだ興味深いコミュニケーション論ともなっており、今私達がこの時代に問うべき大きな問いとして発動しているといえよう。論文主査の布施英利先生からは、論文はまだ更に整理して論旨を明快に書き出すよう指摘を受けたが、同時に作品は独特な観点と視点からのコミュニケーションのアプローチの仕方を評価された。また、作品副査の三井田誠一郎先生からは、昨今、作品の形式やスタイルの確立に安易に走る傾向の強い風潮の中で、非常に難しい問題に地道に取り組み、見えにくい事を一個の表現として可視化させていることは希少であるので今後に大いに期待をかけたいと言われた。

以上のことから、私は、作品「やまびこ」を作者が多年に渡り一貫したテーマを持ってたゆまぬ制作の中で思考し試みてきた大きな成果としてこれを高く評価し、友政麻里子を博士号を取得するに相応しい人物と判断する。

#### （総合審査結果の要旨）

友政麻理子は、その創作活動のごく初期段階で、自分自身の不在の父親を想起させる父の香り・整髪料のボマードを自らの頭髮や枕に付ける行為をビデオ映像で記録し見せている。そしてその後、全くの他人である壮年の男性に父親役を頼んで父と娘の食事のひと時を演じた「お父さんと食事」や「おとうさんごっこ」、お婆さんが遠い昔の思い出を繰り返し語る話を、「花電車」というイメージで遊ぶ子供のように電車遊びを演じながら、そのお婆さんと一緒に家族が昔懐かしい人たちの墓を訪ねるまでを辿った映像作品「ハナデンシャの話」がある。さらに、子供のいる家族にある架空の温泉の話を創作してもらい、映像でそれらの家族が語る様子を見せながら、同時に紙吹雪をお湯のように見立てて遊ぶ場に誰もが入れように仕立てた「カミフブキオンセン」では、群馬県みなかみ・埼玉県川越・石川県金沢市で繰り返し映像と物語が作り重ねられてきている。ここでの話は口頭伝承のように人々の話が流れ伝わっていくようにも見える。そして、日常を超えたイメージや場所に連れて行くような話が現れている。これらの作品で伺えるように、身近な人々の話を通して、家族や、父・母・お婆さん・伯父さん・娘や息子やら、様々な人の関わりとその姿、その人たちに抱くイメージの有様が見えてくる作品が連なっている。

そして、博士作品では、「やまびこ」と題して、展示会場の2面の壁にやや斜めに傾いたままプロジェクションされた映像の中の登場人物によって交互に交わされる「やまびこ」は、オノマトペ（擬声語・擬態語）で「愛している」と叫ばれている。作者の友政が、登場する人々に依頼して、そのような気持

ちで云ってもらっているのであるが、遠く遙かに山を眺めながら叫ばれたオノマトペは、次第に都会の雑踏や個人の部屋の中でも交わされ、台所やずっと身近な親子の間でも交わされている場面もある。友政が作品で作り出すこのような場は、日常の距離感では見いだせないものを、ごっこ遊びの方法を用いて導き出しているのである。オノマトペを通して語り得ないことを叫んでいる、表明しているように見える。そのような叫びとイメージが交錯する場が作られている。

論文の中では、友政自身のこれまでの制作に沿って創作の契機となる事柄を記述している。また、制作の方法についての考察では、一種の遊び、ごっこや、何かになる、演じることを通して探っているが、そこにある種の“かたち”を見いだし、その先では日常のなかから演じることで別の場所へ行くこと、束縛からいつもと違った位置へと動ける自由さを持てる場所、時にはその意識をも名指して「アジール」という場を導き出してきている。「アジール」とは不可侵という意味から庇護・聖域・無縁所・避難所とも呼ばれる。社会が形成される以前の所有や支配とは別の原理をそこに見いだし、日常の中でのささやかな遊びや演じる様も、そこに繋がる行為として捉え、周囲の人々と積極的に関わりながら実践して表していくことが示されている。

人の関係性を探りながら進められてきた友政の創作活動だが、この論考のなかでは人間の原初的な存在が持つリズムや身体性にも意識が向けられてきている。作品「やまびこ」のなかで鑑賞者が感じるものは、映像作品が持つ特異な場の臨場感であるが、声や叫び、映像に登場する人々との距離感、時には暖かさなどの要素を鑑賞者が自らの身体を通して感じ取れるように組み立てられた作品はたいへん高く評価できる。作品と論考ともに今後の展開が期待できる要素が多々あり、課程博士学位に相応しいものであることを認め、審査員全員で高く評価する。